

いのちが輝く未来のために 今日そして明日からも



## あけましておめでとうございます

新年あけましておめでとうございます。本年が私たちみんなにとって良い年になるよう、私たちの事務所も東からホッとする風を送り届けることができたいと思っています。

今年の第一便は季節柄、雪を風にしてお届けします。雪はなぜ白いのでしょうか。これは子どもの頃よく思っていた疑問です。雪がカラフルで、いろんな色だったらマーブルチョコみたいで面白いのにと子ども心に思っていました。その後、調べると雪が白いのは、雪がフワフワとしているからの

ようです。雪の結晶はすき間だらけで多くの空気を含んでいるので、そこに光が入ると空気の中で光が乱反射し、白っぽくなるのだそうです。

子どもの頃の疑問と言えば、アメリカ独立戦争は税金が原因で起きたということも不思議に思っていました。なぜ税金のことで戦争にまでなるのかなと思っていました。でも、今はほんとはよく分かります。世の中、武器は鉄砲や大砲だけではない、むしろ魂の抜けた法律の方がよっぽど怖いと身にしみて感じます。特に社会保障

切捨てを中心とする今の政府のやり方は、法律という武器を使って、私たちに見えない戦争を仕掛けておられるかと言えないくらい非人間的な、人権という魂の抜け落ちたものです。私たちがいよいよお上意識を捨て、独立する時かも知れません。一人の人間として、主権者として。

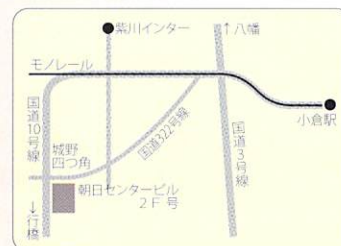
雪は街中を真っ白にします。この街をもう一度、人の命が輝く街にしたいものです。一人ひとりの笑顔で雪の真っ白なキャンバスがカラフルに彩られるように。

■みなさんといっしょに環境や社会の問題を考え、紙面を作っていきます。

# 東風

No.16

- 発行日 2008年1月1日
- 発行所 小倉東総合法律事務所
- 編集者 荒牧 啓一
- 連絡先 千802-0062 北九州市小倉北区片野新町2丁目12番21号  
朝日センタービル 2階  
TEL093(932)5575  
FAX093(932)5600  
e-mail:ponpoko@lime.ocn.ne.jp



障害を持った人生を自分に引きつけて考える

## 命の炎燃やし、人一倍実感を持った人生

「私は生きている。以前とは別の世界に。半身不随になって。人の情けを受けながら、重い車椅子に体を任せて。言葉を失い、食べるのも水を飲むのもままならず、沈黙の世界にじっと目を見開いて、生きている。それも昔より生きていることに実感を持って、確かな手ごたえをもって生きているのだ。一時は死を覚悟していたのに、今私を覆ってい



さまざまに社会とかかわりをもとうと努力する障害者

るのは、確かな生の感覚である。自信はないが私は生き続ける。なぜ?それは生きてしまったから、助かったからには、としかいいようはない。その中で私は生きる理由を見出そうとしている。もっとよく生きることを考えている」。

これは、『寡黙なる巨人』の一節である。著者は多田富雄氏。東京大学名誉教授で世界的な免疫学者だ。その多田氏が脳梗塞で倒れ、半身不随となり、言葉を失った。この本にはそれからの多田氏の生き様が書かれている。その中で、多田氏は、「昔よりも生きていることに実感を持って、確かな手ごたえをもって生きている」と言う。障害を持った今、「昔よりも生きていることに実感を持って、確かな手ごたえをもって生きている」と言う。目をコジ開けられる思いがした。そう、障害を持つ人も生きているのだ。それも人一倍生きること、生きていることに自覚を持って。障害を持った瞬間から今の社会は、その人を特別な存在にしまい、人として生きにくい場所に追いやってしまうが、どっこい、人一倍命の炎を燃やしているのだ。そんな当たり前のことを、この本を読むまで、私はまったく自覚しなかった。自分がとても恥ずかしかった。

## 社会の仕組みに、もう一度目を向ける必要が

そんな頃、障害者自立支援法の問題に関して、岩下均氏の話をお聞きすることになった。岩下氏は、HIV訴訟の頃からの知り合いだ。現在は、「癒とりの里」という障害福祉サービス事業所を運営されている。

岩下氏の話をお聞きして、またまた目をコジ開けられる思いをさせられた。岩下氏が言われた「障害は誰にでも起きうる。障害者には誰でもなる可能性がある」という話だ。多田氏のように脳梗塞による場合もあれば、交通事故の場合もある。精神疾患の場合もある。障害を持つ人と持たない人は同じ線の上に立っているのだ。どこかで障害を持つ人を自分とは違う世界に住む人と考えていた自分に気づいた。偏見を持っていた。恥ずかしく思った。だけど、そうすると、障害を持つ人の生きる問題は私たちのすぐ傍にあって、私たちが自分の問題として、自分たちの社会の問題として、取り組まなければならないはずではないか。そして、障害を持つ人たちが、人一倍生きていることに自覚を持って生きているのなら、私たちや社会はその思いを真正面から受けとめて、障害を持つ人たちが私たちと同じ場所に、人として生きていけるよう答えていかなければならないはずではないか。ところが、今の社会はそうではない。だから、障害を持つ人は孤立する。家族だけが支える。だから、障害を持つ人たちが私たちと同じ場所に、人として生きていけるために必要な社会の中でのネットワークも、ますます育たなくなる。社会もどんどん無関心になる。悪循環だ。そん



な社会の中で、障害者自立支援法は作られた。しかも、弱者を切り捨てる社会保障制度の改悪が進む中で。内容に問題があることは言うまでもないだろう。障害を持つ人に偏見を持っていた私が、偉そうに障害者自立支援法の批判をする資格はないかもしれない。けれど、この問題を見て見ぬ振りをすることは、「生きる」という人として大事なことに目を背けることになるではないか。それは、自分自身の大切な人生でいい加減に生きることにつながるだろう。それは嫌だ。この問題に少しずつかもしれないが向きあうことで、私も自分の人生を、生きるという実感をもって生きてみたいと思う。

## 障害者自立支援法と実践の創造

—障害者の願いを実現する新提案

峰島 厚 著

全障研出版部

### 障害者自立支援法と実践の創造

障害者の願いを実現する新提案

峰島 厚 著

### もっと働きたい 自分らしく活躍したい

キーワードは「福祉ニーズの多様化」「福祉と就業」

全障研出版部

自立支援法が障害者、家族、事業者も含む職員にもたらす問題点を社会福祉基礎構造改革の内容から掘り下げ解説しつつ、国の施策と障害者の要求との乖離が大きくなるなかでも、必死に福祉の「全面破壊」を少しでも「総合的前進」を図ろうとする関係者への、新提案となる書です。前著『障害者自立支

information  
information

新

鮮

情

報

援法の基本と活用』と併せて参考に。

### 憲法をめぐるせめぎ合い

—その今とこれから

坂本 修 弁護士に聞く

マスコミ・文化9条の会所沢編

「憲法改正手続法」（国民投票法）の制定をめぐる緊迫していた2007年3月の坂本氏の法案の危険な内容についての講演をはじめ、4回に渡る同氏のインタビューをまとめたブックレットです。自民大敗の参院選後、民心の奥底からの動きと、安倍首相の辞任、福田内閣成立などの激変の下で、いま改憲

のせめ

ぎ合い

をどう見るのか、時機を得た内容です。

「緊迫した情勢

を前にして、改

憲の道が改憲を

ストップし、憲法

を生かして「もうひとつの日本」への道

が、をあなたと心から語り合いたいと思

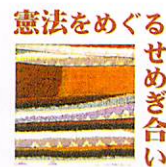
うてのことです」（同氏著『憲法 そ

の真実 光をどこにみるのか』）と併せ

てどうぞ。当事務所にて取り扱いしてい

ます。

●みな様からの暮らしの智慧やおもしろ情報、お勤めの書籍など、ともしお寄せ下さい。



—その今とこれから

坂本 修 弁護士  
(前自由法曹事務所)に聞く

編集 マスコミ・文化 9条の会所沢 編  
発行 全障研出版部

## ありのままでいられる楽しい場所づくり

森の学校共同作業所 荒牧 浩 二



初めまして、森の学校共同作業所の所長をしております、荒牧です。こちらの弁護士さんとは、偶然にも姓が同じ、というわけではなく、実の弟であります。

兄が弁護士で、と他人に話すと、実に意外な顔をされますが、「なに、小さいころは弟のほうが頭がいいって、言われてたんだよ」と、答えるのを、常としています。「ただ、努力する才能が、俺にはなかったけどね、」と、付け加えるのも忘れないようにしています。

さて、何でもいから、何か書くように、と言われましたので、今私が勤務しております障がい者の小さな作業所である森の学校共同作業所について書かせていただきます。

豊前市の山奥の廃校になった小学校に、『もみじ学舎』というところがありまして、そこでは、空いていた教室を利用して、陶芸、染色、バイオリン制作、木工、ぱん工房などが、各工房主さんの自主性において、開かれています。そのなかの一つの店子として、NPO法人森の学校があり、共同作業所があります。作業内容としては木工を中心に、草刈りからちょっとしたリフォームまで、出来ること、楽しいことなら、なんでもやります…という姿勢でやっています。最近力をいれていることとして、山で切ってきたいわゆる雑木や、廃材を細かく加工して、どんぐり、松ぼっくり等と組み合わせて、手芸、工芸のキット、素材として販売することと、その素材を使って、子ども

たちの木工教室（ホットボンドを使って、1時間くらいで、自由に作品を作ってもらいます）を開くことがあります。販売はまだですが、木工教室の方は、年々需要が増えて、百人、二百人規模のイベントにも出かけて行くことが多くなりました。

こんなふうには、作業所としては一風変わったところがありますし、作業の内容も多岐にわたっていますが、来てくれている利用者さんは、出来ることを出来る範囲で、楽しんでくれていると思います（もちろん、この形態があわなくて辞められる方もいますが）。

作業所をやっているいつも思うのは、仕事として収益を上げ、みんなの工賃を少しでも多くすることと、みんなの居場所として、居心地のいい場所を創っていくことを両立させていくことの難しさです。忙しさのなかにはまってしまうと、つい、効率や、能力で人を評価してしまいがちです。それぞれのありのままを受け入れられなくなります。いい、悪いは別にして、一般社会では、そんなことはあたりまえかもしれませんが、ここでは、そう、ありたくないし、逆に、経済至上主義的今の風潮や、そのことの染み付いた自分自身にも、それでいいのか？と問いをなげかけたいところでもあります。

利用者さんの中には、他人のことなんか気にせず、マイペースで、休みたいときは休み、タバコのすいたい時には吸い、天気がいいといったら、とびきりの笑顔を見せてくれるような人もいます。仕事的には困ったもんだ、と思うことも多いのですが、人間的にはとても魅力的で、「俺もあんなふうにならな」と思うこともあります。

昨年の自立支援法の施行以来、利用者さんの負担増を作業所がカバーする形をとっていることや、昨今の原油価格の高騰などで、経営的には厳しいものがありますが、自前の事業分野を如何に伸ばしていくかということと、それでもみんなの居場所としての楽しい場所を、どう創っていくか、の両立をめざして日夜奮闘しているところです。